

読売俳壇

矢島 渚男 選

天井の龍を鳴かせて春惜しむ

京都市 峰尾 秀之

【評】いわゆる鳴龍の廊下で、踏むと天井に反響して独特な音がする。春を惜しむかのように。

縄文の味紡ぎきし能登の海苔

札幌市 武内 政敏

【評】能登の岩海苔。岩に縋って浪の間に巻り取る。縄文の時代から日本人の味覚を培ってきた味が今度の地震で危ない。

雪柳見ごろの海龍王寺かな

奈良市 上田 秋霜

【評】海龍王寺は奈良のまの東北端にあって隅寺ともいわれる。丁度雪柳の盛りだった。光明皇后の創建になる「五重小塔」が国宝の小さな寺である。地味な雪柳が相応しく、よい旅の記録になった。

山間の雨の明るき上り簾

加須市 萩原 康吉

根巻より赤土こぼる植木市

松江市 早坂 哲夫

動くとも見えず田螺の行き違ふ

加須市 福田 啓一

風薫る口笛吹けぬほど老いし

袖ヶ浦市 浜野まどる

本抱いて顎でスイチ暮春かな

木津川市 島野 秀子

受験日といふ引き算の日々続く

山口市 曾我 欣行

あと一寺あと百段の遍路杖

枚方市 安達 京子

高野ムツ才 選

木の芽きら櫨の金に櫨の銀

埼玉県 竹本 遊児

【評】出だしがいい。まず木の芽の光を一瞬見せて、次に曇みかけるように櫨の芽の金色と櫨の芽の銀色とを対比強調した。宮沢賢治の童話の世界のように生き生きとして幻想的だ。

納訥と問へば応へて植木市

大阪市 今井 文雄

【評】問いかけた人も応えた植木売りもどちらもぼそぼそ声なのだ。植木の育て方を聞いているのだろう。植木市での一場面が彷彿。

こんなにも地球が謎で春霞

埼玉県 吉野利美子

【評】春霞の朝の実感。一体誰がこんなきれいな世界を産んだのだ。本当に地球は謎で満ちている。

本売れば小銭となりぬ万愚節

川崎市 折戸 洋

彼岸会や死は生きている者のもの

仙台市 鎌田 魁

ひとつ見えつつき見えてつくしんぼ

奈良市 中島 澤

天守閣残りし城の土筆踏む

松山市 中矢 尚

蔵籠りに数本のバス待てり

川越市 大野有之介

やあと来ておつと車座花の宴

横浜市 石川 幸子

田蛙の声を割りぬく猫車

白井市 毘舍利愛子

正木ゆう子 選

補色混ぜ灰色となり春愁

藤岡市 飯島加津枝

【評】補色とは例えば赤と緑、黄と紫のような組み合わせで、それぞれは鮮やかでも混ぜると灰色。季語によって、それが心の働きにまで当てはまるように感じられるのが面白い。汚れなき羊水であれ春の海

さいたま市 関根 道豊

【評】私たちに繋がる最初の命は原始の海で発生した。今もこの体は殆どが塩辛い水。蒸発し雨となり、水の循環の源である海は、命そのもの。子狸のだぼだぼある田螺かな

津市 中山 道春

【評】こんな場面に遭遇するとは、そもそも作者の体験自体が俳句的。「だぼだぼ」のオノマトペも意外で、読み手はただ素直に納得するのみ。はこべらや続けては見ぬ母の夢

会津若松市 佐藤 秀子

チェロの音は夕日の色や鳥帰る

川越市 横山由紀子

みそざざい杉の根方のうろこに入る

大阪府 池田 寿夫

春の雨行く宛も無く戻れもせず

南房総市 山根 徳一

鳥博士菓箱作りも上手な子

栃木県 あらあひとし

トロントロンと舟のいで行く島の春

岡山市 上塚 香

芹鍋の根のうまさ説く子に夫に

桐生市 高橋 ハマ

小澤 實 選

一年で十センチ伸び卒業す

浜田市 大島二三

【評】一年の間に身長が十センチも伸び、卒業するというのだから、この句の主人公は、おそらくは男子高校生だろう。まさに伸び盛りである。身長という語の省略も効く。両手もて卒業証書高く上げ

札幌市 藤林 正則

【評】卒業の強い喜びを、動作によって示している。卒業にこぎつけるまで、かなりの苦労があったか。これは大学の卒業ではあるまいか。春の風邪淡き色なる葉かな

横浜市 作山 大祐

【評】春の風邪をなおすために淡い色の葉を掌にとって飲む。「淡き色なる葉」に冬季の風邪ではない、春の風邪らしさを感じるのである。みそ汁にスナップエンドウ加へり

松山市 久保 菜

全身に巣蜂をまとい蜜を採る

名古屋市 可知 豊親

五回目の育休の部下桜咲く

我孫子市 梶間 智明

更紗木瓜四人姉妹の里帰りの

東京都 大武美和子

畝端に種袋さす播き終へて

町田市 枝沢 聖文

春の空今朝も鶏機嫌よき

太田市 阪本 和夫

花吹雪バスが来るまであと五分

多摩市 宮田 剛

短歌と朗読①

短歌あれこれ 川野芽生 (歌人)

最近、短歌の朗読パフォーマンスに取り組んでいる。来月11日に予定しているのは、人形作家の中川多理さんの作品に寄せた短歌を、中川さんの個展の会場で朗読するというもの。会場は日暮里にある、かつて映画館だった、その名も「元映画館」というスペース。

朗読では、歌を評する前に読み上げるという習慣があるけれど、短歌の「朗読」をはじめ聴いたのは「マラソナーディング2014 Withガラムンカフェ」という催しにおいてだった。二〇〇〇年代前半に行われていた「マラソナーディング」の十年越しの復活と聞いていた。短歌を始めて数年だった私には、十年前というとなんだか歴史上の出来事のように感じられたものだけれど、今や二〇一四年から十年が経過していることに気付いて、驚く。

△花冷えよ 銀月が双の手を伸べて待ちあゝる、たとへばわが生涯を▽



題字デザイン・イラスト 福田美蘭